

Let's Know Hiroshima Castle.

しろや！ 広島城



No.43



江戸時代初期の広島城下と西国街道(破線) (「安芸国広島城所絵図」国立公文書館内閣文庫蔵に一部加筆)

西国街道はいつ広島城下を通るようになったのか？

はじめに

江戸時代の広島城下には、城下の南方を西国街道が東西に貫いていました。西国街道は大坂と下関を結ぶ幹線道路であり、東海道などの五街道に次ぐ重要な街道(脇街道)として人々の往来に使用されました。

西国街道の前身は古代に整備された山陽道(古代山陽道)という幹線道路で、もともと太田川河口部一帯を避けて北に大きく迂回していた道筋が、中世になると次第に海沿いを通るようになり、さらに広島城の築城によって広島城下に引き込まれたとされます。

その時期については、福島正則が城主だった江戸時代初期頃との見方が強く支持されていますが、毛利輝元が城主だった時期にも広島城下を通る陸路が存在していた様子がうかがえます。

そこで今回は、太田川河口部における山陽道の変遷を振り返り、さらに西国街道が広島城下に引き込まれた時期について探ってみたいと思います。

西国街道と山陽道

江戸時代の広島では、西国街道のことを西国往おう還かん(「広島藩御覚書帳」、西国路(『芸藩通志』)、山陽道(「浜ちどりの記」)とも称したようですが、

今日の私たちは近世山陽道と呼んでいます。

そもそも山陽道とは、7世紀中頃から当時の朝廷によって整備された幹線道路の名前であり、当時は大陸との外交窓口である大宰府（福岡県太宰府市）と都を結ぶ、最も重要な道と位置づけられていました。

安芸（広島県西部）における山陽道の道筋は、その後もルートを変更しつつ江戸時代の西国街道に引き継がれたと考えられています。そのため今日では、飛鳥～平安時代については古代山陽道、鎌倉～戦国時代については中世山陽道、安土・桃山・江戸時代については近世山陽道と呼んで区別されています。

山陽道の道筋の変化

つづいて、太田川河口部における山陽道の道筋の変化を追ってみましょう。

古代山陽道の道筋については、当時設置された駅館という役所の位置や発掘調査などから復元が試みられています。それによると、現在の東広島市八本松から大山峠を越えて瀬野に入り、畑賀、府中、中山、戸坂を経て太田川を渡り、大町、伴、大塚を経て石内、利松に至り、さらに平良へ通じたと考えられています。

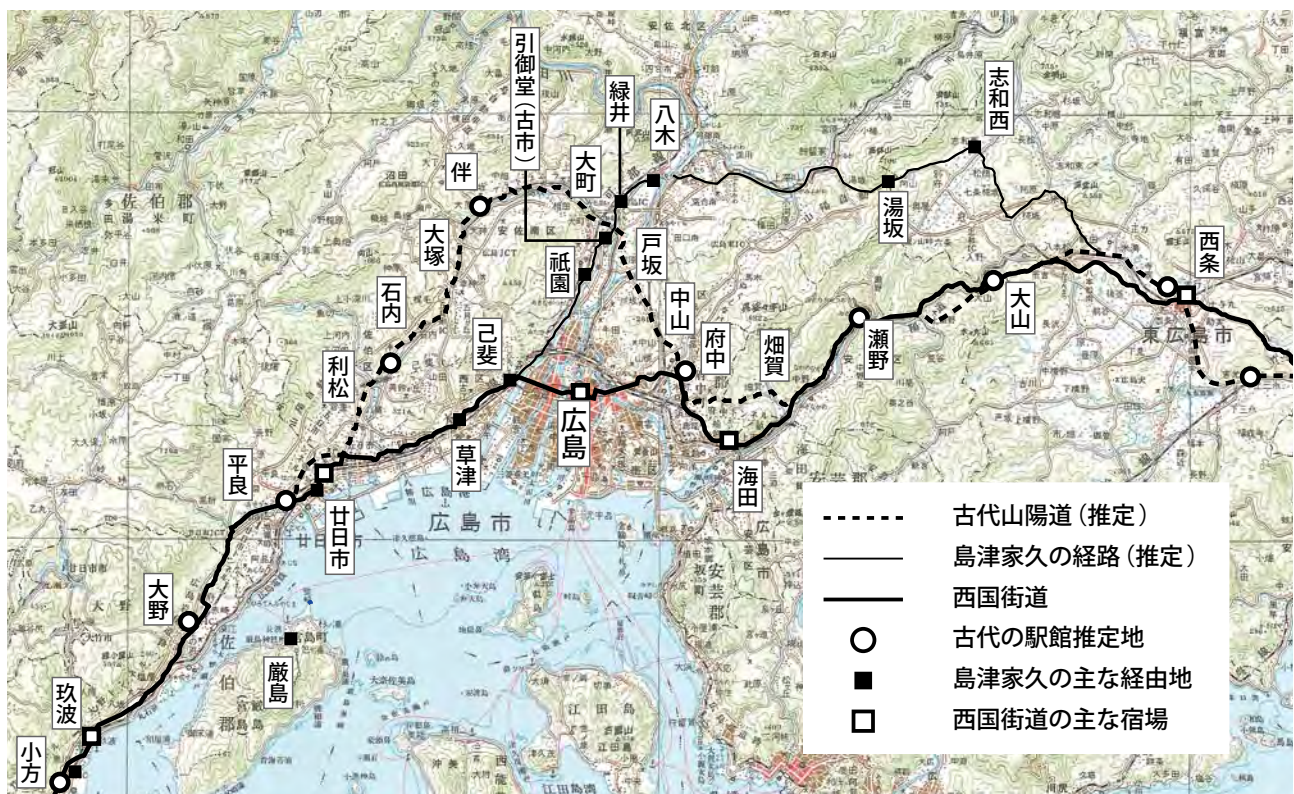
古代山陽道がこのようなルートをとっていたのは、当時の太田川河口部の地盤がまだ不安定だったためと考えられます。

中世山陽道の道筋については不明な点が多いのですが、中世には太田川河口部や広島湾沿岸部において都市的な集落が発展したため、これらの集落を経由するルートが発達し、次第に海沿いを通るようになったとされます。

例えば、天正3年（1575）に薩摩（鹿児島県）の武将島津家久が上洛の途中に安芸を通過した際、家久は小方から厳島に渡って厳島神社を参詣すると、廿日市に再上陸し、草津、己斐、祇園、引御堂（古市）、緑井、八木と太田川西岸域を北へと進み、八木の渡し船で太田川を渡ると湯坂峠を越えて志和西、西条へと進んでいます（「中書家久公御上京日記」）。

注目されるのは廿日市から己斐までの道筋で、この範囲に関しては西国街道と重なる部分が多く、その原形となる道筋が戦国時代末にはすでに出来上がっていたことがうかがえます。

天正14年（1587）には、島津氏討伐（九州征伐）のため九州へ軍を進める豊臣秀吉が太田川河口部を通過しています。その際、秀吉は海田から陸路を通り廿日市へと進んでいますが、残念ながら



西国街道・古代山陽道の道筋

その間の具体的な経路については不明です（「九州御動座記」）。

その後、広島城の築城が天正17年（1589）から始められ、同19年（1591）には広島城が毛利氏の新たな本拠となります。

翌天正20年（文禄元年・1592）には肥前名護屋（佐賀県唐津市鎮西町）へと向う秀吉が安芸を通過しています。その際の経路は、海田から陸路広島へと入り、草津まで進むと船で厳島へ渡って厳島神社を参詣した後、再び船で小方に向かっていきます（「豊臣秀吉九州下向記」）。

広島築城開始の前後において行われた秀吉の二回の下向を比較すると、天正20年には広島城下を経由するという大きなルートの変化が認められ、この時点で西国街道は城下に引き込まれていたとする見解も示されています（『新修広島市史 第二巻 政治史編』）。しかし、こちらは少数意見であり、福島氏時代とする見解の方が強く支持されています。この福島氏時代説とはどのようなもので、何を根拠としているのでしょうか。

福島氏時代説の検証

福島氏時代の広島城を描いた絵図は確認されていませんが、「安芸国広島城所絵図」（表紙写真）など浅野氏時代初期の絵図に見られる様子は、福島氏時代末期と大差がないとの意見があります。

このような考えと、①毛利氏時代の広島城下を描いた「芸州広島城町割之図」という絵図の内容、②江戸時代後期の地誌「知新集」が伝える胡町・東引御堂町（中区）の成立、を根拠として、福島氏時代説はおおむね次のように解説されています。

福島正則は交通政策の一環として、広島城の北方を迂回していた西国街道を城下の南方に引き入れて東西に貫通させました。それに伴い、毛利氏時代には武家屋敷や寺だった場所が町人町に改められ、慶長8年（1603）に胡町・東引御堂町が成立しました。

（『広島県史 近世 I』『図説広島市史』等）
しかし、この説にはいくつか疑問点があります。

まず、根拠①については、浅野氏時代には西国街道筋沿いの町屋となる場所が侍町と記されていること、西国街道筋の川に猿猴橋・京橋・元安

橋しか描かれていないことを理由にしています。しかし、この絵図の信憑性をめぐっては賛否両論あり、そのいずれに従ったとしても毛利氏時代に西国街道が城下を通っていなかったとする根拠には不十分です。

また、根拠②について、胡町・東引御堂町成立に関する記述は17世紀中頃の古文書が引用され一定の信頼を置くことが出来るのですが、そこには西国街道の城下引き入れに関する記述は全く見られません。どうやら、両町成立のきっかけを西国街道の城下引き入れとする見解は、「芸州広島城町割之図」と「知新集」の内容を結びつけた解釈の結果のようです。

よって、「知新集」の記述は、西国街道の城下引き入れがあったとする根拠とはなりえません。

福島氏については、西国街道の神辺（福山市神辺町）と三原（三原市）の間に今津宿（福山市今津町）を設けたこと（「和田家文書」）、海上交通の要衝である下蒲刈島三之瀬（呉市下蒲刈町）に海駅を設けたことが伝わっており（「蒲刈龍隣誌」）、積極的に交通政策を行ったと評価されています。これに加え、広島城や城下町は福島氏時代に完成したと考えられていることが、福島氏時代説が強く指示される理由と思われる。しかし、この説を支える根拠は不十分と言わざるを得ず、福島氏時代説については見直しが必要と思われます。



江戸時代後期の胡町（広島城蔵「広島城下絵屏風」より）

毛利氏時代の広島城下における幹線道路

では、天正20年（1592）の秀吉の名護屋下向時に確認される、広島城下を経由する道筋への変化については、どう考えたらよいのでしょうか。

天正20年は文禄・慶長の役が始った年であり、秀吉の下向に先立って日本中の多くの軍勢が名護屋に集結しており、下向途中の徳川家康も広島城下に宿泊しています(「板坂ト斎慶長記」)。また、水戸城主佐竹義宣の軍勢も同年4月頃に広島城下経由で下向しています(「名護屋陣ヨリ書翰」)。さらに翌文禄2年(1593)8月、佐竹氏家臣の大和田重清が名護屋から水戸へ戻る際、広島城下経由で安芸を通過した例も確認されます(「大和田重清日記」)。

このように名護屋までの往復において陸路安芸を通過した人々は、太田川河口部では広島城下を経由しており、多くの人々の往来に利用される道筋が城下に存在したことがうかがえます。

この道筋の位置付けについては、天正20年(1592)8月に京都・大坂と名護屋の間を結んでリレー方式で公文書・物資を送る制度(次馬・次夫・次飛脚)が整備され、広島がその中継地点(宿駅)の一つに指定されたことが注目されます(「尊経閣古文書纂三五」)。

このことは、広島城下の道筋が京都・大坂と名護屋を結ぶ幹線道路の一部に位置づけられたことを示すとともに、豊臣政権の公のおおやけの道としても位置づけられたことを意味すると考えられます。

残念ながら、広島城下における幹線道路の具体的な経路については不明ですが、その実像の一端を示す史料が残されています。

[毛利氏奉行人連署書状]

太閤様が来る二月に下向されます。そのため己斐の橋・広島中の小橋の修繕が命ぜられました。修繕の人夫については安芸国内から集めてください。誰の領地であっても渋る者がいれば、責任者を捕えて大坂へ報告してください。その上で成敗されるでしょう。(後略)

(「諸家証文」)

この史料は、慶長元年(1596)11月27日に、輝元の側近である堅田元慶^{かただもとよし ちよう}・張元至・榎本元吉が連名で別の毛利氏家臣に差し出した書状です。

文中の「下向」とは名護屋への下向のことであり、翌慶長2年(1597)2月に予定された秀吉の下向に合わせ、「己斐の橋」や「広島中の小橋」の修繕が命ぜられていたことが確認できます。

このうち、「己斐の橋」については己斐の東を流れていた山手川に架けられた己斐橋、「広島中の小橋」については、広島城下を流れる複数の川や運河に架けられた橋を指すと考えられます。

また、秀吉の下向に合わせた修繕ということは、これらの橋は下向ルート上に存在したことを意味しており、毛利氏時代における城下の幹線道路は複数の橋を経つつ己斐に至ると考えられます。己斐付近については、江戸時代の西国街道とほぼ同じ道筋だったようです。

このように、毛利氏時代の広島城下では、豊臣政権の公の道と位置づけられた幹線道路が存在し、それを利用する通信・輸送制度が制定されていました。これらのことから、西国街道の広島城下引き入れは毛利氏時代だったと考えるのが妥当と思われ、今後も引き続き検証していきたいと思えます。

さいごに

毛利氏による広島築城は豊臣秀吉の天下統一によって全国化した政治・経済・流通体制に対応するためのものでもあり、それゆえ交通の要衝である太田川河口部が城地に選ばれています。

西国街道の広島城下への引き込みは、このような背景にもとづく広島築城に連動したものであり、当初から計画されていたとも考えられます。

(篠原達也)



編集・発行

公益財団法人広島市文化財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町21-1
電話：082-221-7512
FAX：082-221-7519

平成27年3月23日発行

広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00
(12月～2月は9：00～17：00)
入館の受付は閉館の30分前まで
入館料：大人370円(280円)
高校生相当・シニア(65歳以上)180円(100円)
()内は30名以上の団体料金
休館日：12月29日～31日(臨時休館あり)
ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト